

日本語社説の文章構造における統括性

— 提題表現と叙述表現に注目して —

Didik Nurhadi

1. はじめに

本稿の目的は、日本語における統括性^(注1)が文章の全体的構造に見いだされる文の集合や段落の相互関係によってどのように形成されるかについて具体的指標を用いて明確にし、かつ統括性に基ついてどのように全体的構造を類型化できるかについて考察することである。

佐久間(2000)では、文章を構成する文や段の統括力を示す言語形式を「文脈展開形態」と述べ、文章の主要な文脈展開形態として、(1) 接続表現、(2) 指示表現、(3) 反復表現、(4) 省略表現、(5) 提題表現、(6) 叙述表現の6項目を提示した。

本稿では、佐久間の説に従い、(5) 提題表現と(6) 叙述表現(提題・叙述表現の関係)に注目し、日本語の文章構造における統括性を考察していく。この2点の分析観点を用いるのは、文章の全体的構造にわたる統括性を示すことができ、文章構造の本質に関わるという性質による。文章は形式的な面から見れば、文の集まりである。但し、単なる文の羅列だけでは文章としては成立しない。文の集まりが文章として成立するには、複数の文が関係づけられて文脈を形成し、全体の構造において内容上のまとまりがなければならない。ここに、文章構造の本質がある。その本質を「統括性」と捉えることができよう。換言すれば、統括性は文章という内容上のまとまりを根拠づけるものであると考えられる。この見方を踏まえると、文章構造を分析するに当たって最も重要な研究課題は、どのようにして統括性が形成されるかということであると考えられる。そこで本稿では、提題・叙述表現が統括性の形成に深く関わっているものであると位置づけ、文章構造を捉えるうえで重要な分析観点とするものである。

2. 先行研究における提題表現・叙述表現の定義

2. 1 先行研究

統括性に関わる代表的な先行研究として、永野（1986）、市川（1978）、佐久間（1987、1995、2000）を挙げることができる。

永野（1986）は統一し完結した言語形式を具えたものを文章と定義し、その“統一”と“完結”との両者を含む概念を“統括”と呼ぶ。永野（1986）では、文章構造を考えるに当たって「接続論」、「連鎖論」、「統括論」の3点の分析観点を設定し、「接続論」によって文脈展開の流れを辿り、「連鎖論」によって全体の構造を把握し、「統括論」によって統一と完結とを最終的に確認すると規定している。

また、市川（1978）はそれぞれの段落と段落との関係から文章の構成形式を考え、統括する段落の有無によって、文章構造を（1）全体を統括する（大）段落を持つものと、（2）持たないものに類別している。

佐久間（1987、1995、2000）は、永野（1986）の3つの分析観点のうち、最も重要な観点である統括論を継承し、主に文章を構成する「段」の統括機能に重点をおいて研究している。佐久間（2000）では、中心段の統括機能の配列位置や配置度数による「文章構造類型」（文章型）として、ア. 頭括型（文章の冒頭部に中心段が位置するもの）、イ. 尾括型（文章の結尾部に中心段が位置するもの）、ウ. 両括型（文章の冒頭部と結尾部にそれぞれ中心段が位置するもの）、エ. 中括型（文章の展開部に中心段が位置するもの）、オ. 分括型（文章の2か所以上に複数の中心段が分散して位置するもの）、カ. 潜括型（文章中に中心段がなく、主題が背後に潜在するもの）の6種の分類を挙げる。これ以後、多くの文章研究が佐久間の研究に基づいて行われるようになった。

佐久間の研究は、分析観点が客観的に整理されており、特に前述の分析観点（1）～（6）は、文章の文脈の指標となる項目をほぼ網羅していると考えられ、多面性という点で優れている。永野（1972、1986）市川（1978）の欠点を補う方法が提示されているといえる。従って、本研究でも佐久間（2000）の観点を使い、社説の分析を行うことにしたい。

ただし、佐久間の研究から応用するのは、あくまで観点である。佐久間の分析では書き手の主張や文章の趣旨を示す主題文の位置から頭括型、尾括型、中括型等のような類型を抽出することで有益な知見が得られるが、佐久間（2000）では、文章

の統括機能を見いだす観点を提唱して、その観点から中心段を決めて文章を類型化したにとどまっている。文章の全体的構造がどのように形成されるか、あるいは文章の中心段のありかの違いが文章の類型として日本語文章のどのような特徴を反映しているのかについては必ずしも明らかではない。従来の文章論の整理は、日本語学習者にとって、どの主題文が文章の趣旨を示すものか、また各々の文章型が全体的構造としてどのような特徴を持つか、あるいはそれぞれの文章型の統括性がどのように形成されるかについて十分に把握することができないと考える。これは佐久間が提出した観点自体から生まれる限界ではなく、観点の使い方及び分析対象から生じる限界であると筆者は考える。佐久間（2000）では、多様な文章をもとに類型化が行われている。しかし日本語の文章における統括性の形式を明らかにするためには、むしろ趣旨の明確な論説文において、佐久間の提出した6つの観点の出現や分布の様相を観察することが有効であると考えられる。そこで本研究では、論説文としての社説文章をとりあげ、日本語の文章の全体的構造とその分布がどのような特徴を持つかを究明することを重要な課題とする。

佐久間は文章の趣旨を示す主題文の出現位置を重視した分析・分類を行っているが、主題文にも見解判断を含むか否かなど多様なものがある。出現位置といった特定の観点に偏らない分析・分類を行うことにより、佐久間によって提出されている文脈展開形態の内実の具体的な考察をさらに進めた形で、日本語の社説を分類したい。

2. 2 提題表現と叙述表現の定義

文章論において、文章・談話の話題展開を正しく理解するには、当該の文章・談話における話題を挙げる提題表現^(注2)と、それに対応する叙述表現との組み合わせが重要な手がかりとなる。（永野（1986）、佐久間（1987、2000）、野村（2003）、河内（2008）、河内・佐久間（2010））

提題表現、叙述表現の定義については多くの研究者によって多様な定義が行われるが、先行論の説を検討しながら概念・定義を詳しく規定したのは佐久間（2000）である。本稿では佐久間の定義を用いることにする。

提題表現は佐久間（1987）によって「文脈展開形態」として導入された。佐久間は提題表現を「文章や談話で何かを表現するには、相手に伝えたいことから「話

題」として言い表して説明し、それに関する自分の考えや気持ちを述べたり、相手に問いかけたりする。どんな内容についてどのように述べるのかを言葉で表現したもの」と定義している。

そして、叙述表現については、佐久間（2000）が、永野の「陳述の連鎖」をより広くとらえて、導入している。叙述表現とは、提題表現によって文章や談話における「話題」としてとりあげられることがらを説明し、それに対する自分の考えや感想を述べたり、相手に質問や要望などで直接働きかけたりするものと定義している。

本稿では、上記の提題表現、叙述表現に対する先行論の位置づけに基づき、話題展開をまとまりの形成の最重要点と考える立場から、これを統括性として形成し、明示する具体的指標として位置づける。これにより、日本語の文章構造における統括性がどのように形成されるかを考察する。

3. 分析の対象と方法

本研究では、日本語の分析の対象として新聞記事の論説文である社説^(注3)を扱う。

対象範囲は2011年3月分の『朝日新聞』の社説55本、2009年1月分と2011年3月の『読売新聞』の社説102本、2011年3月の『毎日新聞』の社説58本で、合計215本となる。日本の新聞社説は、1日分が題目の異なる2本で構成されるが、祝日や休日には1日1本になる場合がある。

本稿では、文章の全体的構造を組み立てる提題表現と叙述表現との関係を手がかりにして、文章の型を考えていく。分析に当たっては、佐久間（1986、2000）に従い、提題表現を示す言語形式は基本的に文の構造「～ハ（ガ）～デア（ダ）」における「～ハ」あるいは「～ガ」の成分によって代表される部分とし、河内・佐久間（2010）等で挙げられる提題表現の言語形式である「モ」、「デハ」、「ニハ」、「ニツイテイエバ」等を含めることにする。叙述表現についても、佐久間（2000）を参考にし、述部の形態上の特徴と主観的な態度を表す副詞があるか否かによって、事実を示すもの、見解判断を示すもの、感情を示すもの、聞き手への働きかけを示すものの4類に分ける。

4. 文章構造の類型

4. 1 文章構造類型の概観

本節では、具体的な分析を示すまえに、結論を先取りして、全体的傾向と、抽出できる文章構造類型の特徴を述べる。日本語の社説の文章構造は、提題・叙述表現による文脈展開の視点から見た文章構造としては大きく4つの類型に類別できる。

まず、日本語の文章構造における共通点、全体的傾向として、3点の特徴が挙げられる。まず、文や段落の配列からみた特徴を考えてみる。日本語の社説の文章は話題を導入するにあたって、事実を述べる叙述表現や引用表現を含む内容、すなわち客観的に出来事や様子を述べる叙述表現で構成される傾向が見られる。客観的な事実をふまえた話題を先に述べておき、書き手の見解判断を後述するという構成が文章の全体的構造において見出される。その結果、文章の終了部は一般に、書き手の見解判断や読み手への働きかけなどを示すもので構成されることとなる。

また、文章の全体的構造において展開されている話題ごとのまとまりを形成する表現形態には、「そうした」、「こうした」のような指示表現や反復表現、あるいは見解判断の叙述表現等が見られ、これらによって意味内容上のまとまりが示されることで相対的な大小の区分が生じる。各々のまとまりは個々の文脈の内容上の関連と切れ目の相関によって生じるものと考えられる。そこで文章の統括性が形成される。この特徴は本稿で抽出したどの文章類型でも共通して見られる。

更に、文章の全体的構造を締めくくる終了部では、一様に書き手の見解判断や読み手への働きかけなどを示す表現が多用されるという特徴がある。この点から考えると、日本語文章の終了部には共通する特性を見出すことができる。

この点については、西原（1990）が示唆的である。西原（1990：36-39）では、日本語と英語との修辞法に違いが認められ、「日本語では章の終りに配置される内容が英語では冒頭に置かれるという修辞パターンの差が明示されている。英語では次に続く部分の内容への予告として一般的な事柄をまず述べる。英語母語話者の話は最初を聞けば分かる」とし、「逆に日本語では徐々に説き起こして結論に至る、いわゆる『起承転結』型は一般的に受け入れられている」ともする。

以上のような全体的特徴に対し、差異の見出される点に注目すると、日本語の文章構造には4つの類型が挙げられる。ひとまずA型、B型、C型、D型とする。それぞれの類型の特徴を説明するため、便宜上、文章の全体的構造を開始部、中間

部、終了部の3つに分け、これらの部分の特徴に注目してみていく。社説の文章は論説文の一例であって、文章・談話は全体が意味内容のまとまりとされる「開始部」、「中間部」、「終了部」という部分から構成されるという見方が一般的である（市川（1978）、佐久間（2000：55））。

まず、A型の特徴を述べたい。A型は、次の2つの特徴を有する型である。1つ目の特徴は、文章の開始部において、これからとりあげる話題が提起されるが、文章の結論とされる内容や書き手の主観的見解判断は述べられないことである。2つ目の特徴は、全体を貫く大きな話題が存在し、そこからより小さな話題が次々に展開していき、段落群ごとに小括（話題ごとのまとまり）が置かれることである。この型では内容が連続的に展開していくために、話題ごとに文章の切れ目が生じることになる。

A型は後述するB型とある意味で対照的である。A型とB型とを分ける根拠となる相違点は、文章の開始部でどのように話題が展開されるかと、書き手の主張する見解判断が含まれるか否かである。A型の話題展開のあり方は、取り上げる話題が提示されてから、その述べられた話題を受けて新しい話題が次々と展開されるというものである。また、A型の終了部ではそれまでの話題のまとめや書き手の見解判断等が述べられる点もその特徴である。

続いて、B型の特徴を述べる。B型とは、次の2つの特徴を持つものである。1つ目は、文章の話題を提示し、さらにこれについて書き手の見解を表明する開始部を持つこと、2つ目は、中間部が開始部と個別に対応せず段落群ごとに小括が置かれることである。B型の開始部で文章の話題を提示し、書き手の見解を表明するという特徴は、後述するC型の特徴と同様のものであるが、開始部が中間部の段落群と個別に対応するというC型の特徴が、B型では見られない。B型では、終了部においても、文章の話題に対する文章の書き手の見解がはっきりと表明されており、また主張しようとする内容が明示されている。

次に、C型の特徴を述べる。C型は、文章の総括的な主題が文章の開始部に置かれ、後続する中間部と終了部が開始部に置かれた主題について解説するという関係をなしている。換言すれば、C型は、文章の開始部の個々の段落や文が後続する段落群と個別に対応する文章の構造を持つものである。C型の開始部は、中間部の話題を予告しているが、この時、話題の予告だけでなく筆者の主張までが開始部で述

べられる。

4つ目の類型をD型とする。D型に分類される文章は、多様であるが、一見して明らかな言語表現の内容上の特徴によって、一類型と認めることができる。D型の文章の全体的構造は、大きく2つの部分から構成される。まず、前半部は、文章の話題を提示し、それに対する一般的な情報を述べる部分である。つまり、文章の話題提示と、それに対する大局的・抽象的な主張を表明する部分である。それに対して、後半部では、既に取り上げられた話題に対する局所的・具体的な見解が述べられる。一般に、書き手の判断するその問題の解決方法や見解判断は後半部で述べられる。文章の後半部には、文章としての条件を備えたかたまり（開始部、中間部、終了部）の構造が複数並ぶ。なお、この後半部の構成はA型の特徴にほぼ対応している。しかし、D型では、文章の全体をまとめる部分がない。このため、中心段のありかによって分類することが難しい。

4. 2 文章構造類型の結果

本稿の対象をA型～D型の4類に分類した結果は以下の【表1】に示す通りである。

【表1】日本語の文章構造類型

	新聞社 文章型	新聞社			合 計
		読売新聞	朝日新聞	毎日新聞	
1	A型	51	28	28	107 (50%)
2	B型	38	23	25	86 (40%)
3	C型	2	0	0	2 (1%)
4	D型	11	4	5	20 (9%)
		102	55	58	215

【表1】の通り、3紙の新聞社説を考察した結果、A型が50%で最も多く、次いでB型が40%で、これらの文章型が合わせて90%を占めている。この結果から、日本語においてはA型とB型の文章構造が2つの大きな類型をなすことが指摘できる。^(注6)

A型は文章の話題を提示してから、一步、一步、関連する話題を順々に進めていくという文脈展開形態を持つ。また、話題を進めていきながら、ところどころに

話題ごとの小括が置かれる。A型の文章においては、書き手の主張は一般的に、文章の終了部で述べられる。このような特徴を持つA型はDanes(1974)における「Thematic Progression」(テーマ進行)による分類において、「Thematic Progression With Derived Themes」(派生テーマ展開パターン)とされる型の特徴に類似していると考えられる。一方、B型は書き手の見解判断が開始部と終了部に出現するため、佐久間(2000)の述べた両括型とされるものといえる。終了部に結論を持つ「起承転結」を日本語文章の全体的傾向とする先行論の見方や、4種から6種で提案された各種の分類は誤りではないが、本稿でいうA型、終了部のみで主張がなされるものと、B型、開始部・終了部の双方で結論となる主張が示されるものが二大類型であることは、日本語文章の傾向として特筆すべき整理である。

A型とB型に次いで1割弱のD型があり、また次いでごく少数がC型に分類される。D、C型の文章は少数であるが、いずれも日本語の文章構造類型の1つとして注目できる。まずD型は、市川(1975)の挙げた構造上の分類である「複合した文章」の特徴に共通している。「複合した文章」とは、全体的構造をなす1つの文章がいくつかの段に分けられ、全体が何らかの形で関係付けられた構造を指しているものである。このような型は結論・書き手の主張や趣旨のありかのみでは特徴を押さえることができない一方、上で述べたとおり、内部にA型の構造を含む。A型B型のいずれかに分類することはできないが、A型との関連は明らかである。上記の【表1】の通り、全体の9%を占めながらA型、B型とも異なるものとして、その存在を記述し、区別しておく必要がある。

最後に、C型は1%という低い値となったが、本稿の分類において特徴的な構造を持つ文章である。むろん、量的には明らかに少数であるが、その基本構造はB型に共通し、中間部・終了部の内容が開始部の各文と対応するという点で、B型をより類型化、定型化したものと位置づけられる。C型は、当該の話題について最も重要な結論を先に述べるという日本語文章の一大類型、B型の構造をさらに明晰化したものといえ、その点で、特筆すべき文章構造類型と位置づける。日本語学習者にとっては、B型の構造を理解する上でC型が大きく示唆的であるという点も強調しておきたい。

以下、本稿では具体的な考察としてA型とC型を取り上げ、統括性がどのように展開されるのかについて見ていく。A型は最も数が多い文章の型として、C型は、

A型と二大類型をなすB型の構造を明晰化した文章構造としてとりあげるものである。他の文章の型については別稿にて詳述したい。

4.2.1 A型：文章例1

まず、A型の具体例を見ていく。

【表2】文章例1における提題表現と叙述表現

段落	文	提題表現	叙述表現			
			事実描叙	見解判断	感情を表す	読み手への働きかけ
I	1	英語の授業 ^①	変わろうとしている			
II	2	4月から新たに小学校5、6年で、外国語活動 ^②	週1コマ必修となる			
III	3	(外国語活動は)	簡単な英語でゲームをしたり、歌ったり英語の音や表現に親しませ、対話をする態度を育てる			
IV	4	中学校 ^③	来年から各学年とも授業が週4コマに増える			
	5	高校 ^④ 英語授業 ^⑤	再来年 英語での指導が基本になる			
V	6	学校英語 ^⑥	読み書きばかりで、海外に行っても役立たず			
	7	そんな批判にさらされてきた文部科学省 ^⑦	「英語が使える日本人」を育てる計画を8年前に立て、推し進めてきた			
VI	8	(文部科学省 ^⑧)	聞く、話すのコミュニケーション重視にかじを切り、中3なら英検3級、高3で準2級～2級程度の力を身につける、と目標も定めた			
	9	その方向で充実させるの ^⑨		新学習指導要領だ		
VII	10	当の学校現場 ^⑩				どうか
VIII	11	すでにほとんどの小学校 ^⑪	英語をとり入れた授業を始めている			
	12	が、ネイティブの外国語指導助手頼みの所 ^⑫		少なくない		
	13	必修化を前に、担任の先生の不安 ^⑬		まだまだ大きい		
IX	14	中学や高校で、生徒がグループやペアになって英語でやりとりするような授業 ^⑭				どれだけ実践されているだろうか
	15	(中学や高校での授業は)	つい、旧来の訳読や文法中心の授業になる			
	16	(中学や高校での授業は)	廊下を歩いてみても、英語の時間のクラスが一番しんとしていたりする			

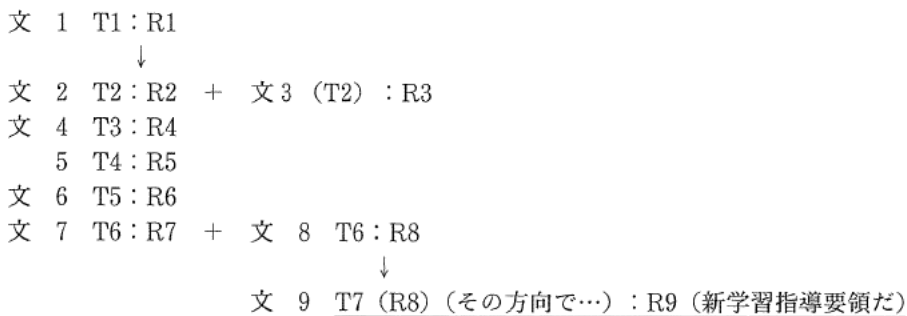
X	17	教える準備 ^国		万全とは言えまい		
	18	小中高とも研修機会を充実させる、良い教材をつくる、地域の核になる先生を育てる、地域の人材に協力してもらうなど、応援態勢づくり ^国		急務だ		
XI	19	大事な ^国		先生の役割が変わってきたということだ		
	20	(先生の役割は)	教壇から知識を授けるだけでなく、児童生徒間のコミュニケーションを引き出し、言葉という手段や、それを駆使して考える力を身につけさせる			
	21	(これは)		英語という科目に限らない大きな流れでもある		
XII	22	小学校の外国語活動 ^国		その入り口		
	23	求められる ^国		先生の英語力より、授業を組み立てる教師力だ		
	24	(教師力は)	準備不足で必修化が進み、中学に入ると英語嫌いになってしまうとの懸念も聞かれる			
	25	小学校と英語教員がいる中学 ^国		より連携を深めることも課題だろう		
XIII	26	(中学は)	「英語は今や国際共通語」「中韓のように早くから英語を」といった声が強まる			
	27	(中学は)	他方で「まず日本語の力を」「一律に教える必要はない」との考えもある			
	28	(中学は)		多くの大人に苦い思い出からだろう		
	29	英語教育 ^国 には		常に四方から注文がつく		
XIV	30	高校までの英語教育の目的 ^国		一定のコミュニケーション能力とともに、さらに伸ばすための土台を整えることだろう		
	31	外国語を学ぶこと ^国		世界を知る大切な営みでもある		
XV	32	そろそろ苦手意識 ^も			卒業したい	
	33	私たちの準備 ^国				できているか
	34					Are we ready?

※()は省略された提題表現を復元したもの。□は提題表現を示す言語的標識。

文章例1は『朝日新聞』2011年3月1日付の社説。

文1から文9までは、文章の開始部を占める最初のまとまりである。文1では提題表現の「英語の授業」という話題を提起し、叙述表現の「変わろうとしている」は提題表現で示された話題について説明を付与する。後続する文2～文9まではこの話題を次々と展開していく。具体的には、文2と3は「小学校は」、文4は「中学校は」、文5は「高校は」、文6は「学校英語は」、文7、文8は（…文部科学省は）といった提題表現によって話題を論理的に展開している。文1から文8までは、事実を表す叙述表現で統括されている。続く文9では、「その方向で充実させるのが」という指示表現を含む提題表現が先行した話題を全体的にまとめている。特に、文9の「新学習指導要領だ」という叙述表現は形態には事実を示す表現といえるが、「～ノハ～ダ」という構文を持つ文9は倒置した分裂文と見なされるため、見解判断を示すものと位置づけられる。同様に、後の文19、23も見解判断を示す叙述表現といえる。文2から文9までは、同じく話題を表す連段Iを形成し、以下の【図1】のように整理される。

【図1】文1から文9までの話題展開とまとまりを示す提題・叙述表現



※ ↓ : 話題の展開を示す + : 後続する文は先行した文の話題を保持するが叙述表現を添加することを示す
 二重下線 : 話題のまとまりを示す (Tn) : 提題表現1、2…等を示す (Rn) : 叙述表現1、2、等を示す
 (以下、同様)

文10は「当の学校現場はどうか」という疑問文によって新たな話題を導入している。これからとりあげようとする話題を導入する提題・叙述表現が疑問表現によって提示されれば、その後の話題は当の話題に対する事実の説明や見解判断等を表す応答表現が予想される。

【表2】に確認できるように、文11～13では「…小学校が」、「…外国語指導助手頼みの所が」、「…担任の先生の不安は」という話題をとりあげ、提題表現に対応する叙述表現として「英語を…を始めている」という事実が示されてから、「少ない」、「まだまだ大きい」という形容詞による書き手の見解判断の叙述表現で話題を統括している。

続く文14は「中学や高校で…どれだけ実践されているだろうか」という疑問文によって、先行文の話題を進めており、さらにこの話題は文15から文17まで維持されている。文15と16の叙述表現は共に事実を表す表現で先行文14の疑問形式に対する答えであると見なすことができる。文17と文18は先行の話題を統括する機能が見られる。特に、文18では、「小中高とも」という語句の繰り返して示される提題表現によって先行した話題を全体的にまとめていることを示している。また、文18の「急務だ」は書き手の見解を表す叙述表現としてここまでの話題全体をまとめる役割を果たしている。

以上、文14～文18の話題の展開とまとまりを観察すると、これらの文や段落が相互に組み合わされて大小の話題を形成し、全体で連段IIをなしていることが分かる。

文19には「大事なのは」とあり、新たな話題が導入されている。その提題表現に対応する叙述表現は「先生の役割が変わってきたということだ」という書き手の見解判断であり、これで話題を統括している。文20、文21は先行文の提題表現を省略表現^(注5)の形で話題として続けてとりあげ、この話題について事実を叙述している。後続する文22では転じて「小学校の外国語活動は」という新たな話題がとりあげられるが、その話題は展開されず、文23、文24、文25では、主に英語の教師の「役割と教師力」が話題とされ、それらの話題について、主に見解判断の叙述表現で述べられている。

後続する文26～文29まででは、小学校と中学での「英語の教育」が話題としてとりあげられている。この話題について、文26と27は事実の叙述表現であるが、文28と文29は話題に対する見解判断を表す叙述表現を持つ。

文30と文31ではそれぞれ「高校までの英語教育の目的は」、「外国語を学ぶことは」といった提題表現が先行した話題を直接展開し、この話題について、「…伸ばすための土台を整えることだろう」と「世界を知る大切な営みでもある」といった見解

判断の叙述表現でまとめている。特に、文31の「外国語を学ぶことは」は先行文脈（段落 XI 文19～段落 XIV 文30）の話題を締めくくる中心文として統括機能があると考えられる。文19から文31は連段 III をなしていると考えられる。

文32には先行した文からの反復・省略による継承は認められないため、新たな話題に移っていると解することができる。文32には「そろそろ」という時間を表す語句が開始部の文2「4月」の言い替え、すなわち関連語句による反復として認められるだけでなく、文章の終了部を導入する働きをしていると考えられる。後続する文33と文34は共に、同様の事柄を述べている。つまり、「私たちの準備はできているか」を英語で「Are we ready? 」と言い替え、反復する形であり、読み手に直接働きかけて話題をまとめている。

4.2.2 文章例2

次に、C型の具体例を見ていく。

【表3】文章例2における提題・叙述表現

段落	文	提題表現	叙述表現 (注7)		
			事実描叙	見解判断	読み手への働きかけ
I	1	景気がこれほど急角度に落ち込むとは、			誰が予想したのだろうか
II	2	30日に発表された生産、雇用、消費などの経済統計は、	軒並み大幅な悪化を示した		
	3	落ち込みは		今後しばらく続くと見ねばなるまい	
III	4	(今後は)		景気の底割れを食い止められるかどうかの正念場にある	
	5	政府・日銀は、		政策を総動員し、切れ目なく対策を打つべきだ	
IV	6	昨年12月の鉱工業生産は、	前月比10%近く減少し、過去最大の下げ幅を2か月連続で更新した		
V	7	自動車や電機など輸出産業を中心に、今	減産が拡大している		
	8	海外景気が冷え込み、輸出の早期回復が望めない以上、さらなる生産の縮小は		避けられまい	
VI	9	さらに、減産で労働者の仕事は	奪われている		
	10	12月の失業率は		前月から一気に0.5ポイントも跳ね上がり、4.4%になった	
	11	しかも、リストラや倒産など「会社都合」の失業は	急増している		

VII	12	3月末までに失職見込みの非正規労働者 [5]	これまでの8.5万人から 12.5万人に急増した		
VIII	13	雇用悪化の影響で、家計の消費支出[因] 10か月連続で前年を下回るなど、「負の連鎖」[因]	一段と加速している		
IX	14	内閣府[因]、 2002年2月に始まった景気拡大[因]	07年10月で終わっていたと認定した		
X	15	5年9か月に及んだ「戦後最長景気」の 実質成長率[因]	年平均2%で、「いざなぎ景気」の5分の1にすぎない		
XI	16	国全体の経済がそう大きく膨らまなかった割に、リストラの強化で企業[因]	大幅な利益をあげた		
	17	しかし、利益の多くが株主配当や内部留保に回り、労働者の収入[因]		増えなかった	
XII	18	これ[5]		内需の柱である消費が弱まり、外需依存を強めた一因だろう	
	19	成長の果実[因]		企業から家計に渡り、さらに企業に還元するサイクルを取り戻さねばならない	
XIII	20	景気[因] 日本経済[因]	後退期に入ってからすでに1年を超えており、「長く深い」不況のトンネルに迷い込みつつある		
XIV	21	政府・日銀[因]、	総額75兆円の景気対策を打ち出している		
	22	中小企業の資金繰り支援や雇用対策など、悪化のショックを和らげる重要な政策だ[因]、 応急処置だけで長期不況から脱するの[因]		難しい	
XV	23	(長期不況から脱するには)		景気浮揚を目指し、財政出動による追加策の検討が必要だ	
XVI	24	ただし、省エネ・環境や医療・介護分野、学校耐震化など、将来の成長や安心・安全につながる事業に配分し、ばらまき[因]		避けねばならない	

※文章例2は『読売新聞』2009年1月31日付の社説。

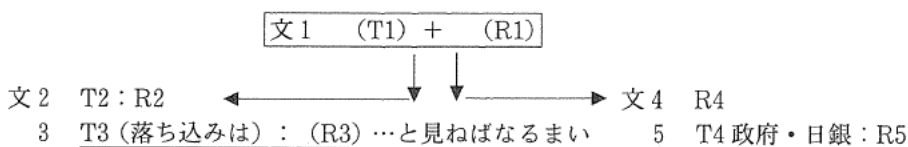
文章の開始部にある3段落を分析してみよう。段落I文1は、「景気がこれほど急角度に落ち込むとは誰が予想しただろうか」といった疑問形式である。前述のように、疑問形式で表される提題表現は話題を予告するという機能を持つ。

文2と文3では順に、「…生産、雇用、消費などの経済統計が」と「落ち込みは」という提題表現を提示するが、これは、文1の話題を受け、その話題に対して具体的に示しているものである。文3は先行した提題表現を保持している。そして、文2、文3の叙述表現はともに、書き手の主観的な見解を提示することで話題を統括している。まず、この段落が1つのまとまりを成しているのものであると考えられる。

後続する段落 III も先行した話題に対する書き手の見解を表すものである。文4で、提題表現が省略される一方で、「景気の底割れを食い止められるかどうかの正念場にある」といった叙述表現は後続する文5の話題と絡み合っ、書き手の判断を表わしている。文5には「政府・日銀は…政策を総動員し、切れ目なく対策を打つべきだ」という新しい話題と見解判断の叙述表現が形成され、新しい段落の話題を提示している。これは文章の全体的構造においてまた1つのまとまりといえる。

以上、文1から文5までの話題の統括性を考察した結果、その話題の展開とまとまりは次の【図2】のように整理できる。

【図2】文1から文5までの話題の展開とまとまりを示す提題・叙述表現



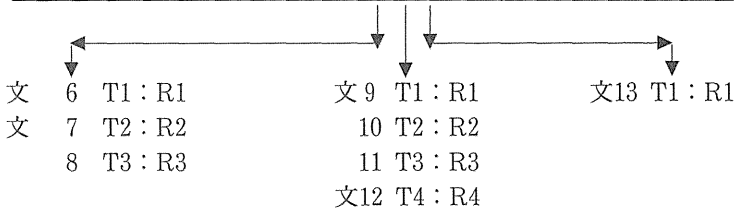
文6からは、先行文5の話題との直接的な「つながり」を表す言語指標が見られないため、新しい話題を始めるものと判断できる。文6の「昨年12月の鉱工業生産は、」という新しい話題を示す提題表現は文2の話題を展開するものであり、引き続き文7「…今も」、文8「…早期回復が望めない以上、さらなる生産の縮小は」という大小2つの話題をとりあげて、一連の話題をなしている。この話題に対して、文6、文7は事実描叙であるが、文8は「避けられまい」という見解を表す叙述表現を持ち、統括がなされている。

段落 VI 文9では「さらに、減産で労働者の仕事」という接続表現を含む提題表現で「失業」を話題としてとりあげる。この話題については、文10「12月の失業率は」、文11「しかも…失業が」、文12「3月末までに失業見込みの非正規労働者も」という一連の話題展開を示す提題表現でまとまりを成している。その話題に対して、文9から文13まで事実を示す叙述表現でとりまとめて、話題の統括をなしている。

以上、段落 IV 文6～段落 VIII 文13における提題表現と叙述表現の関係からみた話題の展開とまとまりを分析すると、この段落は文章の4つ目のまとまりを成しているといえる。文6から文13の話題の展開とまとまりは【図3】のように整理できる。

【図3】文6から文13までの話題展開とまとまりを示す提題・叙述表現

文2 (T) (30日に発表された生産、雇用、消費…が) + (R) (…悪化を示した)



文14では、「内閣府は」を大きな話題とし、「2002年2月に始まった景気拡大が」を小さな話題として表す提題表現が示される。この新しい話題は、文15、文16のそれぞれ「5年9か月に及んだ「戦後最長景気」の実質成長率は」、「国全体の経済がそう大きく膨らまなかった割に、リストラの強化で企業は」という話題によって展開され、文14から文17までに叙述表現によって、段落IXの話題に対する事実が加えられている。後続する文18「これも」は指示表現と助詞「も」を含む提題表現で先行する話題を継承しながら、文18の「内需の柱である消費が弱まり、外需依存を強めた一因だろう」といった主観的見解判断を示した叙述表現で統括している。続いて、文19の「成長の果実が」という小さい話題を表す提題表現による話題を取り上げ、「企業から家計に渡り、さらに企業に還元するサイクルを取り戻さねばならない」という書き手の見解でまとめている。

文20では、「景気は」、「日本経済は」という2つの大話題を表す提題表現が見られる。この提題表現は先行の話題を転換し、文章の開始部で述べられた文1の話題を再びとりあげ、事実を示す叙述表現で説明したものである。

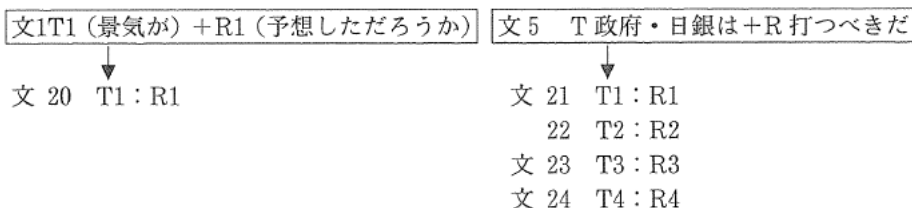
文21以降は文21「政府・日銀は」、「…景気対策を打ち出している」といった大きな話題を示した提題・叙述表現を、文22「中小企業の資金繰り支援や雇用対策など、悪化のショックを和らげる重要な政策だが…長期不況から脱するのは」、文23「(長期不況から脱するには)」、文24「…将来の成長や安心・安全につながる事業に配分し、ばらまきは」といった小さな話題に分けるかたちで取り上げて、これらの話題に対して「難しい」、「必要だ」、「避けねばならない」といった主観的な見解判断を示す叙述表現で、文章の終了部を統括している。

文21「政府・日銀」に関する話題は文章の開始部の先行段落IIIに対応する。換

言すれば、文章例2の開始部は後続する話題の内容を予告してまとめており、書き出しを構成する段落の各文は文章の他の部分を構成する段落に対応するという特徴が見られる。このような文章構造は前述のA型、文章例1では見られない。

以上の文24までの話題の展開とまとまりは、次の【図4】のように整理できる。

【図4】文20から文24までの話題展開とまとまりを示す提題・叙述表現



5. おわりに

以上、本稿では、日本語の社説の構造における統括性を提題表現と叙述表現の観点から考察し、その特徴を基にして日本語の文章構造を分析した。その結果、日本語の文章構造の類型A型、B型、C型、D型といった分類を提案した。本稿では、その特徴を次のように整理した。

A型：(1) 文章の開始部は文章の話題の内容を予告しない。(2) 1つの話題が提起されたあと、その内容が次々に展開していき、段落群ごとに小括(話題ごとのまとまり)が形成される。(3) 文章の終了部では最終的に、文章中に取り上げられた話題全体を網羅してまとめる。

B型：(1) 文章の開始部ではこれから取り上げる話題が提起されてから、書き手の見解判断が述べられる。(2) 文章でとりあげる話題の内容は少なからず開始部で導入される。

C型：(1) 文章の開始部では話題の内容を予告し、書き手の見解判断などが示される。(2) 文章のはじめの部分構成する段落群は後続する段落群と個別に対応する。

D型：(1) 文章の全体的構造は一般に、前半部と後半部とされる2つの大きな部分的まとまりから構成される。(2) それぞれの部分的まとまりは個別的な文章とされる構造を持つ。(3) 文章の全体をまとめる終了部はない。

以上、日本語の文章構造類型のうち、書き手の主張が、終了部にのみ示される A 型と開始部と終了部の両方で示される B 型が二大類型といえることが分かった。

ただ今回の考察では、他の言語の文章の持つ構造との比較対照は行っていない。筆者の母語であるインドネシア語の文章構造について分析することや、その整理による比較対照、英語など多言語の文章論の知見などに基づいて日本語の文章構造の特徴を明示することを今後の課題とする。現在までの分析によれば、インドネシア語でも A 型と B 型が多い一方、C 型、D 型のようなものは見られない。C 型と D 型は日本語に特徴的なものと推測できる。今後さらに、日本語とインドネシア語の文章を比較対照の中心としつつ、それぞれの文章の全体的構造について、どのような特徴が構造化できるのかを考察していきたい。

注

- (1) 本稿で用いる統括性は茂呂 (1982) によるが、佐久間 (1987、1995、2000) の統括機能、市川 (1978) の整合性、永野 (1986) の統括論などの概念と重なり、文章の全体的構造を把握する観点の 1 つである。
- (2) 佐久間 (1987、2000) では、永野 (1986) の提題表現の言語形式を広くとらえて、提題表現とされる言語形式としては「ハ」、「ガ」のほかに、「モ」、「トハ」、「ッテ」、「ト言エバ」、「トキタラ」、「ナラ (バ)」等のようなものがとりあげられている。
- (3) 社説は、そのとき社会の話題となっている問題や事態を社の意見や主張によって位置づけて一定の見解を表明する文章である。
- (4) 複数の段落が相互的に内容上の統一体をなしているものを連段と呼ぶことにする。
- (5) 佐久間 (1990) では「略題表現」と称するが、本稿では高崎 (1990) の「省略表現」という用語を用いる。
- (6) 木戸 (1994) では、新聞投書の文章構造を文の機能の観点から考察し、書き手の主張が文章の終わりにくるもの (本稿での A 型に相当) と文章のはじめと終わりにくる文章構造の型 (本稿での B 型に相当) が多いと指摘しており、本稿と同様の見解を示している。
- (7) 佐久間 (2000) では叙述表現を 4 種類に分けるが、そのうち、「感情を表す」叙述表現は本稿の対象においては現れないため、【表 3】に「感情を表す」叙述表現の欄を省くことにする。

佐久間の分類は一般の文章構造を分析するのに有効的であるが、論説文としての社説文章には更なる検討の必要があると考えられる。社説文章には「感情を表す」叙述表現がほとんどでない。これが論説文の特徴の 1 つであると考えられる。

参考・引用文献

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』(教育出版)
- 河内彩香 (2008) 「講義と雑談の談話における提題表現の比較」(『早稲田日本語研究』第17号、早稲田大学日本語学会)
- 河内彩香・佐久間まゆみ (2010) 「第4章 講義の談話の提題・叙述表現」佐久間まゆみ編『講義の談話の表現と理解』(くろしお出版)
- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」(『表現研究』第55号、表現学会)
- 佐久間まゆみ (1987) 「「文段」認定の一基準 (I) - 提題表現の統括」(『文藝言語研究言語篇』11、筑波大学文藝・言語学系)
- 佐久間まゆみ (1995) 「中心文の「段」統括機能」(『日本女子大学紀要文学部』第44号、日本女子大学)
- 佐久間まゆみ (2000) 『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成9年度～平成11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(早稲田大学日本語研究教育センター)
- Danes, F. (1974) Functional sentence perspective and the organization of the text.
In F. Danes (Ed.), *Papers on Functional Sentence perspective*. Hague/Paris.
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』(朝倉書店)
- 西原鈴子 (1990) 「日英対照修辞法」(『日本語教育』第72号、日本語教育学会)
- 野村真木夫 (2003) 「第10章 テクストの意味と構造」北原保雄監修・佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座7 文章・談話』(朝倉書店)
- 茂呂雄二 (1982) 「日本語文章の形式的表示(2) - 統括性を中心に -」(『読書科学』第26巻第1号、日本読書学会)

(ディディク・ヌルハディ/名古屋大学大学院博士課程後期課程)